すぎのこ　161
2021 1/1
公益財団法人 すぎのこ芸術文化振興会
事務局：〒171-0022 東京都豊島区南池袋4-19-6 TEL.03-3984-2396 FAX.03-3984-2264
狭山研修センター：〒350-1315 埼玉県狭山市北入曽695-1 TEL.04-2968-4721 FAX.04-2950-7706
嬬恋研修センター：〒377-1611 群馬県吾妻郡嬬恋村干俣 TEL.0279-96-1015 FAX.0279-96-1015

2面・3面　巡回公演だより／園からの声／「第二回　昔話読み聞かせ・人形劇フェスティバル」開催／制作だより
4面　日本芸術文化振興会助成事業／ＪＫＡ補助事業　ほか

http://www.suginoko.org/
E-mail: support@suginoko.org

運命の道に学ばされる
これからのあり方

理事長　大場　隆志

明けましておめでとうございます。

皆様におかれましてはつつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、本年も素敵な一年となりますよう心からお祈り申し上げます。

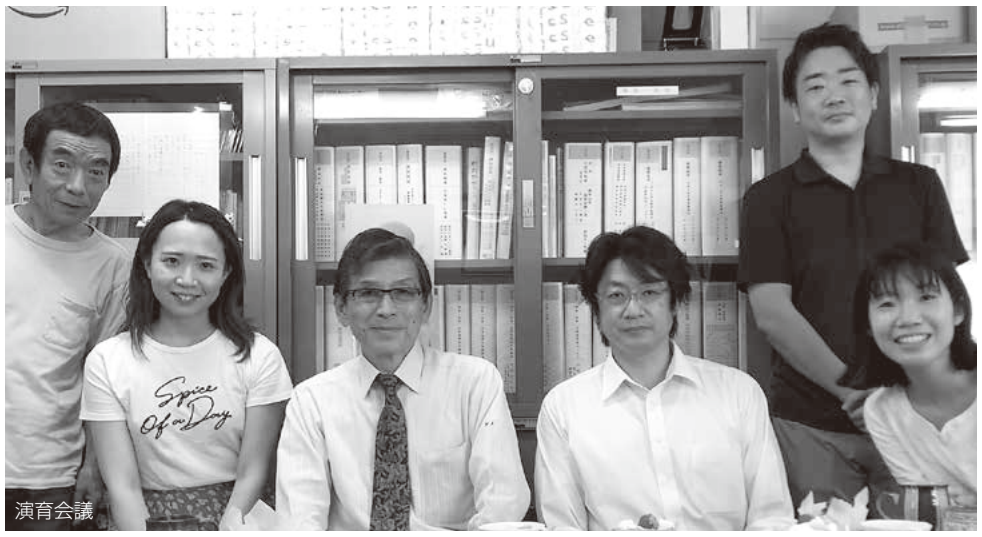
昨年、新年のご挨拶において、二〇二〇年は東京オリンピック・パラリンピックが開催される記念すべき年で、劇団すぎのこが誕生したのも一九六四年八月一日であり、今年で五十六年を迎えます。まさに東京オリンピックから次の東京オリンピックまで人形劇団として活動してまいりましたと申し上げました。そして、その二ヶ月後に、新型コロナウイルス感染症という未曽有の事態になるとは、思いもよりませんでした。

東京オリンピックは開催未定の延期となり、すぎのこ人形劇の上演も一時は中止を余儀なくされました。

人には「自ら」選んで歩む道と「運命」に歩かされる道があるようです。

コロナ禍で私たちは、ある意味「運命」の道を歩かされているわけですが、この「運命」の道を歩かされている中で、どのようなことを学び、成長に結びつけることができるのか。このことによって、その後の運命の大きな分かれ道になるということだと思います。

コロナ禍を経て経済や働き方は、時代の流れが十年以上進んだと言われています。


演育会議

「経済は、財の経済から知識の経済へと移行した」とドラッカーがこう述べて五十年が経ち、今や「知識社会」と呼ばれるようになりました。人類は、ここに至るまで「知識を道具に適用」し、狩りや工場などの道具を進化させてきました。二十世紀に入ると「仕事に知識を適用」し、製造現場を中心に仕事の改善を行ってきました。さらに戦後、「知識を知識に適用」するようになりました。マネジメントはその代表格と言えます。

ドラッカーは、「知識を知識に適用する能力こそが、知識労働者の生産性向上の鍵である」と言っていました。学習した知識に自分なりの知見や洞察を加えて実践し、目に見える成果をあげることができるかどうかが知識労働社会の生き残りの鍵である、という意味でこの言葉をよく使っていました。

つまり、知識そのものは、完全にコモディティ化したということであり、もはや「知っている」だけでは、ただの情報で、何の競争力にもならないということです。

知識に自分の知見や洞察を注入して、独自のものとして再構築し、実践に適用し、成果をあげることができるか、また結果を出すことができるかが、厳しく問われる時代になってきたということだと思います。

一方で知識は、仕事や技能を無くしはしなかったが、仕事の生産性と働く者の人生を大きく変えました。知識は、職業の定められた社会を、職業を選べる社会に変え、さらに職業を創造できる社会に変えました。

一つの知識が最終的な製品やサービスに結びつくものではありませんので、それを生かしてもらう組織と相互依存関係を築きながら、新たな価値を創造していくことになります。職業の選択肢が増えたのは、戦後、企業が社会の課題を解決する中心となったことから、その数が増えたと考えられます。

自分の持っている知識と組織の持っている知識で相互依存関係を築きながら、成功するために必要なのは以下の六つであると言えます。

①仕事の目的を考える。
②働く者自身が生産性向上の責任を負い、自立的に自らをマネジメントする。
③継続してイノベーションを行う。
④自ら継続して学び、人に教える。
⑤知識労働の生産性は、量よりも質の問題であることを理解する。
⑥知識労働者は、組織にとってのコストではなく、資本財であることを理解する。知識労働者自身が組織のために働くことを欲する。

ここで、面白いことが分かります。今までの肉体労働者の生産性向上のための条件と真逆であると。

ここに重大なギャップがあり、新しい時代に順応できない要因があると言えます。

例えば、目的をあまりよく考えないで仕事をしている人はいないか。指示命令を待ち誰かに管理してもらおうとしている人はいないか。自ら学ぶのではなく誰かに教えてもらおうとしている人はいないか。などを考えてみてください。

会社の管理体制が問題であるとの声が漏れ聞こえてきそうですが、本当に必要なのは自律性であり、管理や監督されることではないということです。知識労働のマネジメントのあり方は、従来の常識と逆なのです。

これからは、とくに長けた才能もない普通の人たちが、自らをマネジメントしなければならないのです。したがって、知識労働者たる者は、これまでは存在しなかった問題を考えなければならなくなるということです。

具体的には、自分の果たすべき貢献は何か、自分の強みは何か、自分は働くべきふさわしい所で働いているかなどを問うことです。それは自己成長という人生のテーマをマネジメントすることを意味します。したがって自律性を磨くための人間学を、「すぎのこ演育」として、世の中に広めてまいりたいと思います。

公益財団法人すぎのこ芸術文化振興会としては、この「運命」の道を歩かされる中で、次のことを考え、取り組んでまいります。

一、「すぎのこ演育」の実践化。
二、人形劇の新たな取り組み。
三、望ましい営業方法の開拓。

これからも、私たち、すぎのこ芸術文化振興会は、子どもたちの未来を育てる財団法人として、邁進しつづけてまいりますので、本年もこれまで同様のご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

巡回公演だより

三まいのおふだ班
七海　美流歌

新型コロナウイルスの影響で、慌ただしく一年が通り過ぎた。仕事もままならないまま、ただ耐える、しのぐの一年。その一年を悔いの無いように有効に過ごせたかと聞かれたら、首を縦に振ることがなかなか出来ないのも少々悔しい。

だけど、そんな一年だったからこそ、新しい取り組み、「演育」のやり方をいろいろと考えられたと思う。演育に取り組んでいこうと決まったのは結構前だったけれど、それが目に見える確かな形、台本として手元に届いたのは、今年度に入ってからだった。

最初、台本を見た時は悩んでしまった。どんな感じにすればよいのか分からなく、同じ台本を班ごとの個性に任せる信頼に応えなきゃという心の重圧もあった。何より同じ台本を班の裁量でということだと、己の中の無意志な比べ合いで自分が先にダメになるかもと不安になった。そして更に悩ませられたのは、「人形劇ではなく、人形を取り入れたワークショップ」という形式だった。コロナ禍だから子どもに声を出させない。それを司会進行して行かなければならないということで、未知の領域に足を踏み入れた気分になって仕方がなかった。

でも、班員といろいろ話し、意見を出し合い、言葉の一音すら追及する勢いで、今まで以上に台本と向き合った。ゆっくりと時間をかけて作り上げたら、これが思っていた以上に楽しかった。その楽しさに便乗する気持ちで、楽しくも分かりやすいワークショップを目指した。そして、実際に現場で子どもが笑ったり、うんと首を縦に振ってくれるのを目の当たりにして、感動して泣きたい気分だった。私たちの言葉がちゃんと届いて、しっかり受け止めてくれているんだと気づかされた。子どもたちが私たちの不安を取り除いてくれた。

この感動を胸に、新年もまた根気強く演育と子どもたちと向き合って行きたい。

このつぎなあに班
長谷川　唯

コロナ禍で上演が月に数回となって、はや数ヶ月。昨年は子どもたちに会える日が少なかったが、こういった事態でも楽しみに待っていてくれる幼稚園や保育園があることにほっこりする。

10月にうかがった上演先では、帰り際に子どもたちが門の前に集まり、「ばいばーい！また来てね！楽しかったよー！」と元気いっぱいお見送りしてくれた。車が見えなくなるまでずっと…。何度も経験しているはずなのに、その健気さに毎度尊さを感じる。その小さなカラダから放つエネルギーを受けた、車窓からお別れの手を引っ込めると、ホッと車中がささやかな幸福感に包まれる。笑顔にできてよかったな。上演できてよかったな。コロナで世間が騒がしくなる前の変わらぬ子どもたちの姿がそこにあった。それが嬉しかった。と同時に、コロナがなければ共有できていた時間があったことも思う。年度ごとに届けるお話もメンバーも変わる。今年度、観せられなかったところには、もう自分が演じる「このつぎなあに」を観てもらうことは叶わない。それが少し切ない。コロナで自粛期間があったり、人と会うのを控えるような年だったからこそ、息子と会えないおじいさんの寂しさ、おじいさんともう会えないと悟った時のたぬきの気持ち…きっと、より伝わるものがあるはず。子どもから大人まで今だからこそ観てもらいたいお話だ。

「このつぎなあに」は来年度で巡回ラストとなる。コロナが収まり、少しでも多くの人に届けられることを願う。

はだかの王様班
湯浅　香織

劇団すぎのこは「ナマの舞台を届ける」という創立者の想いで創られた劇団なので、世の中がコロナでオンライン、リモート…と働き方が変わって更にデジタル化が進み、人との接触を避け、直接会わず、話さず…という流れになってしまうと、この劇団の想いが果たせないということになってしまいます。

とはいえ、それを行うことは難しく、映像を撮ったりもしてみました。でも、映像では一方通行の芝居になってしまうのです。

秋になり、徐々に直接上演先にうかがっての公演が出来るようになりました。カメラの前で演じるのと、実際に目の前に子どもたちがいて演じるのでは、やはり芝居が変わってきます。子どもたちの反応があり、それに対して応答したり、子どもたちの様子に合わせて芝居したり。

お芝居は俳優だけでなく、観客も一緒に参加して作られるものなんだなと感じます。終わった後、「楽しかった」「面白かった」「また来てね」と言ってもらえることで、映像では分からない、相手の反応が直接聞けて、私たちのモチベーションも上がり、心の栄養にもなります。

ただ、子どもたちが近寄ってきてタッチを求めてきても、避けなければならないのは心苦しい。

感染を防ぐには人と接触しないことが確実なのかもしれないけれど、人と会わず、インターネット、ロボット、無人店舗、自宅にこもって仕事…という世の中になってしまったら、人間は更に機械や電磁波に囲まれ、コミュニケーション能力は下がり、鬱々とし、除菌や他人の菌に触れないことで、ますます免疫力が下がり…。

科学の発達は素晴らしいことだけれど、便利すぎると幸せを生まない気がします。便利な技術は然るべき所に使い、SF未来より、昔のような、自然に囲まれ、直にコミュニケーションをとり、強く、人間らしく生きられる世の中が戻ることを私は願います。

おむすびころりん班
石山　和佳

あけましておめでとうございます。

昨年は、旅に出られない日々が続き、その間たくさん稽古をしてきました。しかし、いざ旅に出て

上演をしてみると、稽古では見えなかった「もっとこうしてみよう」という部分が見えてくるのです。

「おむすびころりん」というお話に込められた作り手の想い、それを軸に私は人形劇をしています。人形劇を見た子どもたちは、それぞれに何かを受け取り、また俳優も、子どもたちから受け取る。その何かは人形劇として形になり、次の上演先の子どもたちへと巡っていくのだと思います。

一ヶ月後、一年後、少しずつ内容は違ってくるでしょう。みなさんのところにお届けするころには、どんな人形劇になっているのか、どうぞお楽しみに。

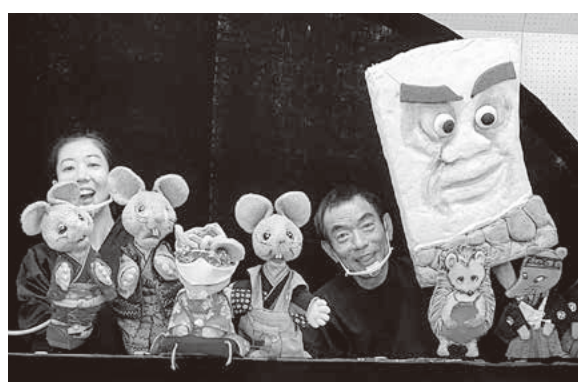
ところで、「おむすびころりん」のお話には手遊びが出てきます。子どもたちが一生懸命に手遊びをする様子がとってもかわいいので、ご注目ください。

もぐもぐ劇場 班

下村　あきら

「ねずみの嫁入り」「かもとりごんべえ」という作品を上演するとき、両方の作品で共通して使っている道具があります。それは、「団扇太鼓」という、床に置かずに片手で団扇のように持ち、もう片手のバチで体を動かしながら軽快に叩くことができる道具です。

もともとは仏教の法具。お寺で唱題する際に使われるそうですが、今では楽器として様々な場面で使われるようになりました。「トトトン・トン・トン」と、リズミカルに響く太鼓の音は、昔話の雰囲気を最大限に引き出し、人形劇を見る子どもたちに視覚だけではなく聴覚から、そして肌に伝わる太鼓の振動から、物語の世界へのイマジネーションを導いてくれます。



「太鼓の音」というのは、なぜあれほどにグッとくるのでしょうか。太鼓の音と笑い声の重なりは、耳にも心にも心地よく響きます。伝えていきたい物語があるように、伝えていきたい音がある。すぎのこの語る昔話を、どうぞお楽しみに！

「第二回 昔話読み聞かせ・人形劇フェスティバル」開催

この度、「第二回　昔話読み聞かせ・人形劇フェスティバル」開催が、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」助成対象の活動として採択されました。昨年度に開催した「第一回」では大変ご好評いただき、「またぜひ、このようなイベントを開催して欲しい」と言う声を多数いただきました。

子どもたちの楽しい思い出となるよう、職員一同、全力を尽くして取り組んでまいります。皆様、ぜひお誘い合わせの上、お越しください。

独立行政法人国立青少年教育振興機構様のご支援に、心より御礼申し上げます。

制作だより

あけましておめでとうございます。昨年はいつにも増してあっという間だった気がします。普段ですと、忙しい日々にあっという間という感覚になることが多い気がしますが、昨年の場合は少し違うようでした。

例年と比べるとやはり公演数が少なく、いつもだったら旅に出っぱなしの俳優たちも図らずも時間ができてしまいましたが、むしろこの時間が無ければできない事、やりたかった事に挑戦し有効活用していた俳優もいたようでした。

何となくやりたいと思っていた事も、今すぐやらなければいけないような状況になると、何だか時代にせき立てられているようで不思議ですね。

すぎのことしても、かつてないほど大変な状況に陥りました。今まで当たり前にやっていた事ができなくなったり、新しい事に挑戦したり、試行錯誤の日々でした。きっとこの状況は今年も続くことになるでしょう。いや、もしかしたら昨年よりもっと大変になるかもしれません。乗り越え、もっと強くなりたいと思います。そんなすぎのこを是非応援していただければ嬉しいです。

（菅谷　香純）

園からの声

このつぎなあに

■認定こども園旭ヶ丘幼稚園（宮城県仙台市）

わかりやすく、おもしろく、心温まるお話でした。子どもたちは少しびっくりしたようですが、一見怖そうな登場人形も、実はかわいらしい声と明るく愛らしいキャラクターで、そのギャップがよかったです。

楽しい時間をありがとうございました。

■港北幼稚園（秋田県秋田市）

今回もすばらしい劇を、感動をありがとうございました。出会いの喜びと別れの切なさが、子どもたちに伝わったと思います。演技はもちろんのこと、舞台セットのセンスも最高です。また来てください。

おむすびころりん

■美川保育園（島根県浜田市）

毎年楽しい人形劇をありがとうございます。今回も、子どもたちの大好きな物語で、0歳児～5歳児まで楽しめる内容でした。

子どもたちの笑顔が印象的でした。スタッフの方の声の大きさ、速さは（ゆっくりと聴きやすい）、私たち保育士も学ぶものがありました。

■みすゞ保育園（山口県長門市）

園児たちも知っているお話で、怖くもなかったため、1才児でも楽しめました。セットもよくできていて、大人も楽しめます。

毎年ワクワクしながら人形劇が観られて、ありがたく思います。

はだかの王様

■杉の子保育園（佐賀県多久市）

コロナ禍の中でやっと観劇することができ、とても嬉しかったです。この作品を通して、子どもたちは真実を見る目、そして伝える勇気を持つことを知りました。王様が最後に国民のことを思い、はだかのままでパレードをされたところがすごくよかったです。

■宇土幼稚園（熊本県宇土市）

子ども、職員を含め、みんなで楽しく観させていただきました。

特に、王様がはだかになるところがおもしろかったようです。年長児は少し内容に踏み込んで、正直になんでも話すことの大切さも学ぶことができたようです。

三まいのおふだ

■水俣さくら保育園（熊本県水俣市）

子どもたちは皆さんと言葉を交わしたり、一緒に参加したりしながら観劇し、よく笑い、喜び、楽しんでいました。終演後も会場の片づけや消毒剤を持参される等、配慮していただき、ありがとうございました。

■カトリック志布志幼稚園（鹿児島県志布志市）

怖い内容かと思っていましたが、面白さもあり、子どもたちもすごく喜んでいる様子でした。演育は初めて見ましたが、とてもよかったと思います。

もぐもぐ劇場

■須津幼稚園（静岡市富士市）

今回2本立てで、子どもたちがよく知っているお話とあって50分が短く感じました。

子どもたちの反応を上手く受け取り返しが、さすがは下村さん、見事でした。

お姉さんとのやりとりも息がピッタリ！かけ合いもよかったです。（中略）できましたら、今年の演目を3年後に再演していただけるとうれしいです。

■水野保育所（埼玉県狭山市）

手遊びや人形を使っての温かな導入があり、子どもたちの心もほぐれてリラックスし、人形劇の世界に入り込んでいました。

人形一つ一つの動きに笑ったり、じっと集中したりし、本当に楽しい時間が過ごせました。戻ってからも手遊びをしたり、導入の音楽を口ずさんだり、人形の真似をするなど、余韻に浸っていました。

独立行政法人 日本芸術文化振興会 助成事業

令和2年度芸術文化振興基金の助成事業として、「おむすびころりん」全国巡回公演を実施しています。新型コロナウイルス感染症の流行により、昨年5月以降上演が叶わない時期が続いておりましたが、おかげさまで10月ごろより徐々に公演数も増えてまいりました。ご観劇いただいた皆様には感謝申し上げます。

しかしながら、日々感染状況が変化しておりますので、私共も感染対策を緩めることなく、今後もより一層気を引き締めてまいりたいと思います。本助成事業は令和3年3月まで実施予定でございます。時節柄、むやみに「ぜひご観劇ください」と申し上げることは難しいのですが、もしご観劇のご予定がございましたら、ご相談いただけましたら幸いです。

新型コロナウイルスが流行してから一年が経ちます。皆様のご健康とご多幸を、そして一日でも早く本来の日常を取り戻せるようにお祈り申し上げます。

芸術文化振興基金助成事業

公益財団法人 JKA補助事業

Auto Race

令和2年度オートレースの補助事業として、「心を育てるすぎのこ演育ワークショップ」を実施しています。コミュニケーション能力や表現力を育むための教材として、人形や冊子、DVD・CD等を製作し意気込んでおりましたが、新型コロナウイルスの影響で思うように実施することが出来ず、歯がゆい思いでいます。

新型コロナウイルスの流行により人と対面することが困難になった現在、コミュニケーションのスタイルが変化、そして多様化しています。しかし、いかなる場面でも必要になるものは、やはりコミュニケーション能力や表現力であることを、この生活が長引くにつれてより一層強く感じています。これは子どもも大人も関係なく必要なスキルでもあります。

すぎのこは「演育」を通じて皆様のお役に立てるように、引き続き努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

すぎのこ活動継続のためのクラウドファンディングを行っています

新型コロナウイルス感染症の流行により公演数が激減し、一時は収入がゼロの月が続きました。昨年秋ごろより、公演数が徐々に増えたものの、感染流行の状況は変化し続けており、依然として厳しい状況が続いています。

そこで、これからも活動を継続していくためにクラウドファンディングにて支援を募ることとなりました。ご支援額は1,000円からご選択いただけます。ご支援いただいた方々には返礼品として、金額に応じてオリジナルTシャツや教材をお送りいたします。

支援の申し込み及びプログラムの詳しい情報は、https://motion-gallery.net/projects/puppet_suginoko よりアクセスください。支援の募集期間は2021年1月19日（火）23:59までとなっております。

これからも日本全国、津々浦々の子どもたちに日本の昔話・民話、世界の民話を人形劇で届けていきたいと願っております。ご支援を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

各種SNSのご紹介

イベント情報や公演の写真などをお届けしています。

チャンネル登録＆フォロー、お待ちしています。

Instagram劇団：@puppet_suginoko
巡回班：@suginoko_junkai

YouTube　https://www.youtube.com/channel/UCj3Ra-N-A2o1vJk4nZkaVRw

活動記録（令和2年9月）

9／14　第二学期全国巡回公演開始

賛助会員を募集しています！

賛助会は、すぎのこの理念・目的に賛同する個人や団体の方々に、当財団の活動を側面から支援していただくものです。

1. 賛助会に関する基本事項に関しては、定款第45条によるものとする。
2. 賛助会は、当法人の目的に賛同し、事業や業務を支援する個人・団体賛助会員からなりその内容は次のとおりとする。
   (1)賛助会費を納める「会費制賛助会員」
   個人　年額　3，000円　以上
   団体　年額　10，000円　以上
   (2)知識、技能、労力を提供する「技能制賛助会員」
   個人　年間　3日間以上
   団体　年間　5日間以上
3. 賛助会員になろうとする者は、申し込み用紙に必要事項記入のうえ、会費（技能提供予定書）を添えて当法人事務局に提出し理事長の承認を受けなければならない。
4. 納入された会費は管理運営費並びに賛助会運営費に使用する。
5. 賛助会員が退会しようとする場合、所定の退会届に必要事項記入のうえ、当法人事務局に届け出る。
6. 会費制賛助会員が二年以上会費を滞納した場合、技能制賛助会員が二年以上知識、技能、労力の提供がなかった場合は、自然退会として扱う。
7. 理事長は、賛助会員の当法人への理解や支援、賛助会員同志の意志の疎通や親睦を図るため、会員の中から若干名の世話人を選び、世話人の中から代表世話人を選任し世話人会を設置する事が出来る。
8. 世話人会が設置された場合、世話人は代表世話人の下に、前4項の目的を達成するための事業や業務を、理事長の指導のもとに企画し実施する事が出来る。
9. 賛助会員は、この法人が刊行する図書及出版物等の優先的配布、その他この法人の行う行事に関して優先的な取り扱いを受ける事が出来る。
10. 賛助会員が、会員として相応しくない行為があると認められる時は、世話人会及び理事会の、各々3分の2以上の議決により除名する事が出来る。
11. 前項の理由により除名する場合、理事長は、予め本人からの文書または口頭での意思表示を求め、理事会において最終判断をする。
12. 納入された会費及び提供された技能はいかなる理由があろうとも返還はしない。
13. この賛助会規程を改廃しようとする場合、理事会の議決を経なければならない。